



TITLE:

資料9 ニホンザル放飼群における 食物獲得優先順位と新奇食物受容 過程(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

日上, 耕司

CITATION:

日上, 耕司. 資料9 ニホンザル放飼群における食物獲得優先順位と新奇食物受容過程(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1991, 21: 94-94

ISSUE DATE:

1991-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164193>

RIGHT:

一般に霊長類の犬歯はオスでとくに著明に発達している。今回は犬歯形態にどのような性差が存在するか、また種間差はどの程度あるかを明らかにする目的で調査を行った。分析は比較的資料数が多いニホンザルを中心に行い、その結果を他の霊長類と比較した。結果：＜オス上顎犬歯＞1. 舌側面中心隆線が近心へ偏位し強く発達するため、唇側面近心隆線との間に深く鋭い溝を形成する。2. 近心唇側切縁点角が欠如。3. 舌側面歯頸部には歯帯が存在するが発達は悪い。歯帯は近心から遠心へやや傾斜しながら直線的に走る。4. 尖頭方向から眺めた場合、歯頸部付近の形態はハート形を呈する。＜メス上顎犬歯＞1. 舌側面中心隆線の発達は弱い。しかし発達の良い場合は舌側方向に発達し、舌側面窩を近心と遠心に二分する。オスのような深い溝はない。2. 近心唇側切縁点角が明瞭。3. 舌側面歯頸部の歯帯は比較的発達がよく、V字形に走向する。4. 尖頭方向から眺めた場合、歯頸部付近の形態は中央が強く膨らんだ紡垂形を呈する。また唇側縁は一樣に円弧を描く場合と中央付近でくびれる場合がある。舌側縁も一樣に円弧を描く場合と、中央付近が突出する場合がある。＜オス下顎犬歯＞1. 近心唇側切縁点角は歯頸側よりにある。2. 近心切縁は長く、垂直か遠心へやや傾斜。3. 舌側面歯頸部の歯帯は太い。4. 基底結節の高さは歯頸側ほぼ1/4に位置。5. 唇側面の歯頸線は近心から遠心へ水平に走向。6. 舌側面では近心辺縁隆線と近心切縁のなす角度は鈍角である。＜メス下顎犬歯＞1. 近心唇側切縁点角は尖頭よりにある。2. 近心切縁は短く、歯軸に対しほぼ45°に傾斜。3. 舌側面歯頸部の歯帯は細い。4. 基底結節の高さは歯頸側ほぼ3/7に位置。5. 唇側面の歯頸線はU～V字形に経過。6. 舌側面では近心辺縁隆線と近心切縁のなす角度はほぼ直角。以上の特徴を他の霊長類も基本的にもっていた。

資料9：

ニホンザル放飼群における食物獲得優先順位と新奇食物受容過程

日上耕司（関西学院大・文）

野生餌づけ群における新奇食物の受容については、若年個体（特にメス）が先駆的な役割を果たし、遊び仲間、姉妹、母親などから徐々に周辺個

体へと伝播していく例や、何らかの理由で高順位のオスが第一受容者である場合には、以後、新奇食物摂取が極めて速やかに群れ全体に伝播する例などが知られている。この差異をもたらす要因の1つに、どの個体が最初に摂取を開始したかということ挙げることができる。しかしながら、社会構造や頭数など、同じ条件を持った同一の群れで第1受容者の効果が検討された例はない。

そこで、群れの新奇食物受容過程におよぼす第1受容者の効果を検討するための基礎的研究として、馴染みのある食物の食物獲得優先順位、および新奇食物の食物獲得優先順位とその受容過程との比較検討を行なった。

実験の対象とした放飼群は京都大学霊長類研究所の嵐山D群（全61頭、0歳：6頭、1～2歳：15頭、3～4歳：9頭、5歳以上：31頭）であった。馴染みのある食物としてサル用固形飼料（オリエンタル酵母社製）が、新奇食物として固形キャットフード（エッフェムGmbH社製ブレッキーズ、ビーフ味）が用いられた。各食物の呈示は通常の給餌（午前11時頃）とは別個に、午後1時以降に実験セッションとして行なわれた。1セッションで呈示する食物は固形飼料かキャットフードのいずれか1種類のみであった。各食物を1粒呈示し、それがいずれかの個体によって摂取されるまでを1試行とした。1セッションに400～900試行が行なわれた。試行間間隔は特に定めず、呈示された食物が摂取され、摂取個体と食物呈示から摂取までの潜時を記録したのち、次の1粒が呈示された。

結果より以下のことが明らかになった。固形飼料の場合は、まずαオスが、次にメスガシラが取るというように、ほぼ競合的相互作用より明らかにされている順位に従って、優先的に食物をとることができた。一方、キャットフードの場合には、獲得優先権はやはりこれら高順位個体にあるが、彼らはすぐには摂取せず、その受容については1～2歳の若年個体が先駆的な役割を果たした。

なお、平成2年度共同利用研究報告書未提出者はいない。